

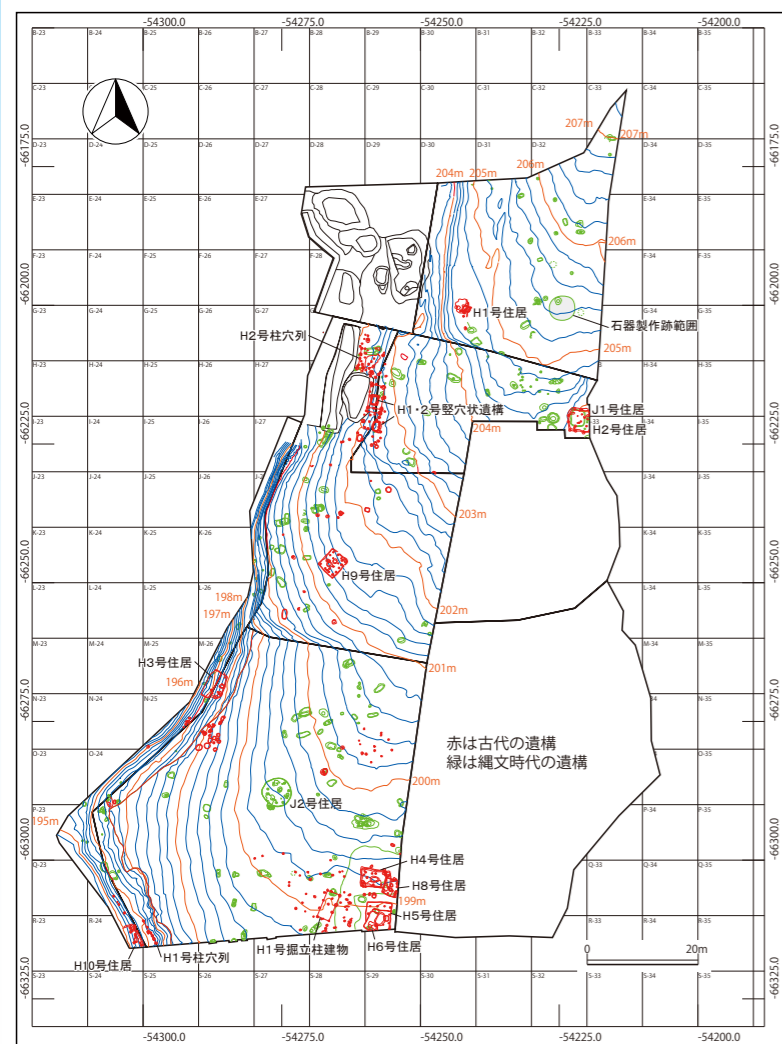
発掘コラム 調査成果報告《旧石器時代～古代にかけて》 秦野市寺山中丸遺跡

寺山中丸遺跡は小田急小田原線秦野駅から北に約3.5km、ヤビツ峠を源流とする金目川の東に位置する秦野市寺山地区に所在し、標高197～207mの南北に延びる台地上に立地します。調査は2013（平成25）年10月から実施しています。

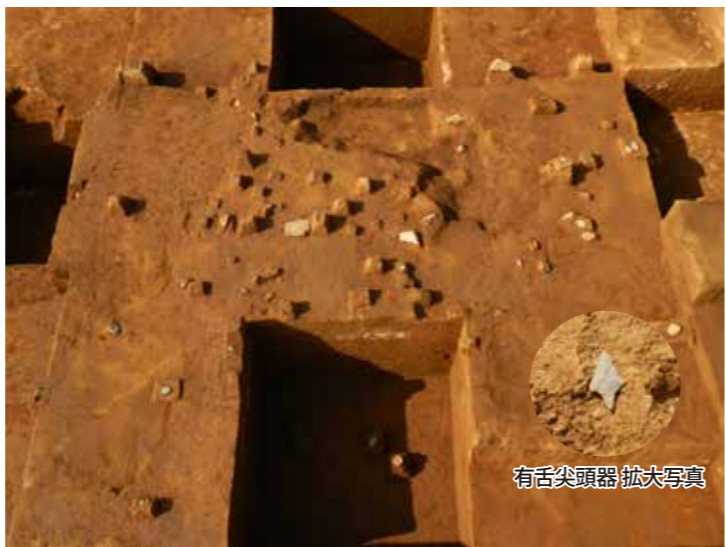
現在までの調査で最も古いものは、関東ローム層中より発見された旧石器時代の石器や礫の集中部です。約1.6～2万年前の土層中より発見されました。

縄文時代では落とし穴や集石遺構が散見され、前期・中期の竪穴住居を各1軒ずつ確認しています。また、特筆すべきは秦野市内で初めての出土事例となった縄文時代草創期の石器製作跡が発見されたことです。有舌尖頭器の加工途中品や槍先形尖頭器（黒曜石）と一緒に隆起線文土器の破片が出土しました。

次に古代では掘立柱建物2軒、竪穴住居10軒や竪穴状遺構、土坑を検出しています。竪穴住居は南端部に隣接する住居を除けば離れた場所に点々とある状況がみられます。出土遺物には8世紀後半から10世紀代の土師器や須恵器が出土し、9世紀代の遺物が主体となる様相が分かっています。その他にも灰釉陶器・緑釉陶器・瓦・瓦塔・刀子などが出土しています。特徴的な遺物としてはH6・8号竪穴住居から出土した墨書土器2点と刀子や瓦を含む土坑から出土した鉄鏃です。墨書土器の一つは外面体部に「子」と書かれています。もう一方は外底面に「子」と書かれています。鉄鏃は長さ12.6cm、頸部に捻りを持つように細工されています。



古代～縄文時代遺構配置図



有舌尖頭器拡大写真

▲縄文時代草創期の石器製作跡（上が北）



▲墨書土器（墨書部分は白地でトレース）

▲鉄鏃



H4～6・8号竪穴住居（上が南）

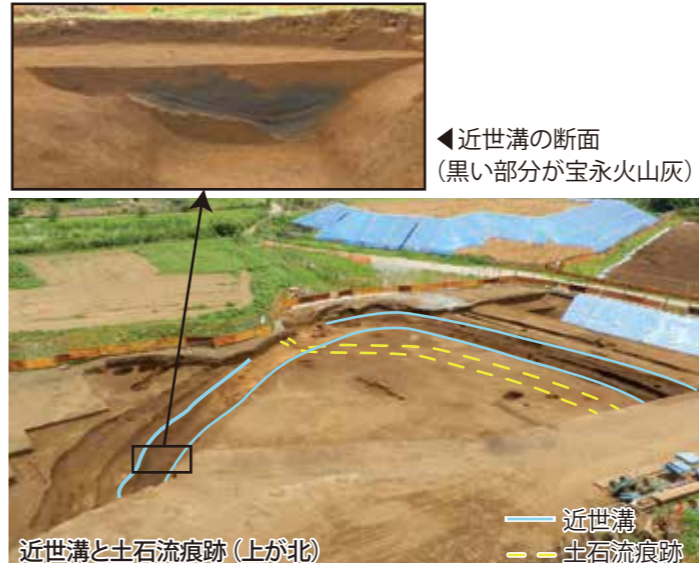
発掘コラム 災害を避けた土地利用？ 秦野市蓑毛小林遺跡

蓑毛小林遺跡は小田急小田原線秦野駅から北へ約3.6km、秦野盆地北東部に位置しています。標高197～199mで、西側に金目川が、東側に小蓑毛沢が流れており、沢の東約100mには寺山中丸遺跡が位置します。2013（平成25）年12月に開始され、現在も継続中です。

近世の耕作跡や溝、土坑墓、奈良・平安時代の土坑、弥生・縄文時代の狩猟用の落とし穴などが多く発見されましたが、現在のところ住居跡は発見されていません。南向きの緩斜面で水源も近く、居住するには好立地のように思われますが、その理由は土砂災害かもしれません。

遺跡西端では大量の宝永火山灰で埋まった大規模な溝が発見され、この溝に一部が壊された別の溝状遺構が発見されました。この遺構は断面形がV字形で、大小様々な石と砂を多く含み、南へ向かって幅が広がっていました。奈良・平安時代の土師器から中世の陶磁器、銭貨まで、広い時期の遺物が出土したことも合わせて、この遺構は土石流の痕跡であることが判明しました。発生時期は不明ですが、宝永火山灰が堆積した溝に壊されていることや出土遺物から、中世から近世の溝が掘られるまでの間に起こったと考えられます。また、土石流の痕跡と思われる樹枝状に広がる複数の溝状遺構や、砂や石を多く含んだ地層が広く見られることなども合わせて考えると本遺跡は北側山間部からの土石流被害に遭いやすかったため、居住地よりも耕作地や墓地として利用していたようです。

また、弥生時代や縄文時代も主に狩猟場として利用されていたようで、縄文時代の石器を製作した跡や、写真(右下)のような埋甕も発見されています。



◀近世溝の断面（黒い部分が宝永火山灰）

近世溝と土石流痕跡（上が北）



土石流の痕跡



近世土坑墓



縄文時代の埋甕